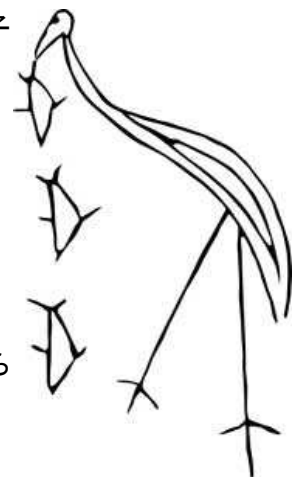
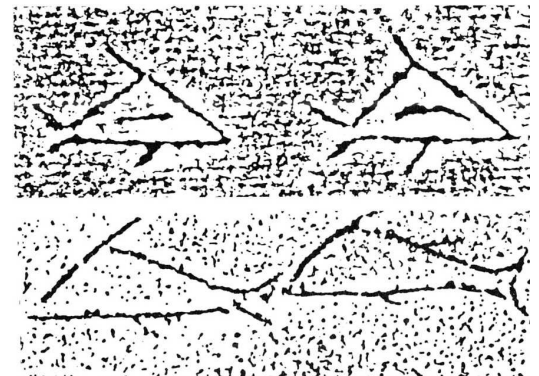


「サメを描いた銅剣の謎を解く」を聴いて

聴講日：H30.2.3
むきばんだやよい塾第18期

一昨年(2016年)の2月に鳥取県立博物館が所蔵する弥生時代中期中葉(紀元前2世紀頃)の銅剣に、サメとみられる絵が描かれていることが分かり発表されました。鑄造後の青銅器に線刻絵画が確認されたのは初めてです。絵は全長42cmの銅剣の柄を装着する部分のすぐ上に鋭利な工具で刻まれ(長さ2.3cm)、流線形や二つの背びれなどの特徴から、イルカや魚ではなく、サメと判断されました。この銅剣は収集家の遺族が26年前に博物館に寄贈したもので、箱書きには「鳥取県某神社伝来」と書かれているだけで、出土地は不明です。博物館は新県史づくりのため、奈良文化財研究所埋蔵文化財センターに調査を依頼して、最新の3次元計測やエックス線撮影などを2カ月かけて実施しました。念のため光や角度を変えて表面を細かく観察して、偶然この絵を見つけたそうです。十数年前にも見たようですが、その時は気付かなかったそうです。

古代の金属製品(銅鐸など)や木製品(櫛や琴など)には魚の絵が書かれているものがあります。その書き方には一定の様式みたいなものがあり、淡水魚であるフナやコイは右図のように描かれています。青谷上寺地遺跡から出土した遺物にある絵は、それらの様式を踏まえた上で、異なる特徴を確認することができます。全体的に長いことと頭部の広がり強調されていることで、シュモクザメの特徴と一致します。風土記にワニと記された生き物もシュモクザメと特定できるのかもしれませんが、青谷の絵は他にもイルカを描いたものと二分できそうです。複数描かれているのは群れている様子かも知れませんが、一匹のイルカが回転ジャンプしているのを表現した異時同図の手法が用いられているのかも知れません。



サメと思われる絵は日本海側の長崎県壱岐市の原の辻、島根県出雲市の白枝荒神、鳥取市の青谷上寺地、兵庫県豊岡市の袴狭、長野県飯山市の山ノ神などの遺跡で出土しています。山ノ神遺跡では、平成9年からの調査で東西11m、南北9mの「コ」の字状の配石遺構で細久保式尖底土器が出土し、縄文早期の遺跡に位置付けられます。シュモクザメと想定される線刻土器は器形、文様、整形の特徴から判断して、縄文時代晩期佐野Ⅱ式期の土器と認められています。

出雲国風土記の島根郡入海(現中海)条に次のような記事の中にワニが出てきます。

粟江埼〔相向夜見嶋、促戸渡二百一十六歩。〕埼之西、入海堺也。

凡南入海所在雑物、入鹿・和爾・鯿・須受枳・近志呂・鎮仁・白魚・海鼠・魚高鰕・海松等之類、至多、不可令名。

【訳文】

およそ南の入海でとれる様々な産物は、入鹿・和爾(わに)・鯿・須受枳・近志呂・鎮仁・白魚・海鼠・魚高鰕・海松などの類で、極めて種類が多いので名を全部はあげきれない。

一方、島根郡北海(現日本海)条の記事にはサメの記載があり、両者は別の生き物と認識されていたようです。

凡北海所捕雑物、志毘・朝鮫・沙魚・烏賊・虫居虫者・鮑・棠螺・蛤貝〔字或作蚌菜。〕・蕨甲羸〔字或作石經子。〕甲羸・蓼螺子〔字或作螺子。〕・螺蠣子・石華〔字或作蠣、犬脚也。或犬曠。犬脚者勢也。〕白貝・海藻・海松・紫菜・凝海藻等之類、至繁、不可令稱。

【訳文】

およそ北の海でとれる様々な産物は、志毘、朝鮫、沙魚、烏賊、虫居虫者、鮑魚、螺、蛤貝〔字は蚌菜とも書く〕、蕨甲〔石經子とも書く〕、甲羸、蓼螺子〔螺子とも書く〕、螺蠣子、石華〔蠣・犬脚、或いは犬曠とも書く。犬脚は勢である〕、白貝、海藻、海松、紫菜、凝海藻などの類で、非常に種類が多くて、名を全部あげることはできない。

安来市では毎年8月に月の輪神事が行われていますが、この起源とされる伝承が出雲国風土記の意宇郡安来郷条に記述されています。天武天皇3年(674)7月13日に、語臣猪麻呂(かたりのおみいまる)の娘が、中海にのぞむ毘売崎の浜辺で遊んでいるとき、一匹の大きなワニに食い殺された。娘のいたましい死を悲しんだ猪麻呂は、娘の遺骸を毘売塚山に葬り、敵討ちを誓って海岸で神々に祈った。すると百匹余りのワニにかこまれた大ワニがあらわれ、猪麻呂は手にした鉾で大ワニをさし殺した。そして腹をさいてみたところ、かみ切られた娘の足がでてきたという。この伝承の中でワニが百匹余りも群れていたことが重要です。

神話の中で語られるワニの生態について、仁多郡戀山の条には次のように書かれています。

戀山 郡家正南二十三里。古老傳云、和爾、戀阿伊村坐神玉日女命而、上到。爾時、玉日女命以石塞川、不得會所戀。上故、云戀山。

【訳文】

郡家の正南二十三里の所にある。古老が伝えて言うには、和爾(わに)が阿伊村(あいむら)にいらっしやる神、玉日女命(たまひめ)を恋い慕って、川を上ってやってきた。そのとき、玉日女命が石で川を塞いでしまわれたので、会うことができないまま慕っていた。だから、恋山という。

似た伝承が肥前国風土記佐嘉郡にも書かれており、ワニはお姫様を慕う生き物と認識されていたようです。

【読下し文】

此の川上に石神あり、名を世田姫といふ。海の神…鰐魚を謂ふ…年常に、流れに逆ひて潜り上り、此の神の所に到るに、海の底の小魚多に相従う。或は、人、其の魚を畏めば殃なく、或は、人、捕り食へば死ぬることもあり。凡て、此の魚等、二三日住まり、還りて海に入る。(『風土記』日本古典文学大系2より)

神話の中のワニの生態は上記のように記されていますが、実際はどうでしょう。サメの鼻先にはロレンチーニ瓶と呼ばれる器官があり、海中の生物が放つ微弱な電流をキャッチする機能を持っています。シュモクザメはこの能力がほかのサメに比べて非常に高く、砂の中に埋まっているアカエイさえも見つけてしまいます。そして少しでも広範囲の情報をキャッチできるようにこの形状になったと言われています。また、出っ張るように離れたそれぞれの目で対象を見ることにより、遠近感を正確に感じることができ、狩りのために一番大事な能力を磨いた進化と言えます。日本で観測されるのはアカシュモクザメ、シロシュモクザメ、ヒラシュモクザメの3種です。アカシュモクザメの体長は最大で4メートル程度で、日本近海では最も個体数が多く、比較的浅めの沿岸で暮らしています。シロシュモクザメの体長は最大で5メートル程度で、外見が白く、外洋性なのであまり人と遭遇することはありません。ヒラシュモクザメの体長は最大で6メートル程度で、個体数は少なく、群れを作らないと考えられています。ヒラシュモクザメを除くシュモクザメはサメの中では珍しく、数百匹単位の大きな群れを作って行動する時があります。群れる理由ははっきりとはわかっていませんが、このようなシュモクザメの習性が月の輪神事として伝承されたのかも知れません。

次の説話は古事記に書かれている「因幡の白兔」です。

・・・ウサギはオオナムチに、「私は沖ノ島に棲んでいたウサギです。以前から陸に上がってみたいと思い、ずっとその方法を考えていました。そこで、海に棲むワニを騙して陸に上がる方法を思いついたので、さっそくワニたちを集めてこう言いました。“ワニたちよ、私とあなたがたの同族、どちらの方が多いのか比べてみないか？”ワニたちが話にのってきたので、続けてこう言いました。“まずは沖ノ島から気多まで並んで欲しい。そうすれば、私があなたがたを飛び越えながら数を数えていきましょう。”そして、私は陸まで並んだワニたちを踏み越えて、気多に辿りつくことができました。ですが、陸に着いたとき私は口を滑らせて、ワニたちを騙していたことを明かしてしまいました。するとワニたちは腹を立て、私の皮を剥いでしまったのです・・・

この説話に登場する「オキノシマ」とは隠岐のことと一般的には言われていますが、地元では鳥取市伏野白兔にある淤岐ノ島のことと認識されています。気多岬と淤岐ノ島の間には岩礁が線状に連なっていて、干潮時には島状となって姿を表し、また、島の北側には波食棚があります。陸と島とを結ぶ線状の岩礁は、伝説の中で白ウサギが島から陸へ渡るのに使ったものと伝わり、「ワニの背岩」と呼ばれています。多数の個体が集まった様子から察すると群れる習性のあるシュモクザメの伝承が説話化したのかも知れません。

独特の頭部の形状は、アカエイを見つけるために進化したと思われるほど、シュモクザメはアカエイが好物のよう

です。そのアカエイを絵馬として祀る神社があります。大阪市浪速区の廣田神社や神戸市長田区の長田神社などです。特にこの二社は神功皇后の三韓遠征後の凱旋説話に由来しているようです。前者の主祭神は、日本書紀の神功皇后条で伊勢内宮の荒祭宮の祭神とされる撞賢木巖之御魂天疎向津媛命で天照大神の別名とされています。撞と木の字が含まれるこの神様とシュモクザメは関係があるのでしょうか。アカエイの絵馬の奉納は明治期に始まったようですが、明治の人はアカエイを好物とするシュモクザメが、古くから伝わるワニのことだと知っていたのかも知れません。

ヤマト王権はワニの後裔であるかのような記事が記紀に書かれています。天孫ニニギの子で兄の釣り針を探しに竜宮を訪れたホヲリノミコト(山幸彦)は、トヨタマヒメと結ばれますが、産屋のすき間から垣間見た妻の姿はワニであったと書かれています。また、生まれた子とタマヨリヒメの子であるカムヤマトイワレヒコ(神武天皇)はヒメタタライズヒメと結ばれますが、この姫はコトシロヌシが八尋の熊罥となってタマクシヒメのところに通ってできた子なのでそうです。つまり、初代天皇の祖母と義父がワニだったということになるのです。古代の人々は祖先が強いものであることに誇りを感じていたのかも知れませんが、多くの海の生物が卵生であるのに対してシュモクザメは、胎盤型の胎生であることに驚きと親しみを抱いていた可能性もあるのではないのでしょうか。

(執筆者注:近年水族館等で単為生殖が確認されています。古代人をこれを知っていて、これこそが驚異の事実であり、神話に登場する理由なのかも知れません)